

日本ラテンアメリカ学会 会 報

No.36

1991年1月20日

第36号 目 次

1. 理事会報告
2. 國際セミナー
3. 会員活動報告
4. 書 評
5. 学術・文化情報
6. 近着会員業績
7. 事務局から

1. 理事会報告

○第49回理事会 1990年12月22日（土）

場 所：上智大学

出席者：細野、水野、加茂、大貫、松下、恒川、中川（文）（委任）、国本（委任）、加賀美（書記）

1. 第45回及び第48回理事会議事録を承認した。

2. 審議事項

- 1)次期日本ラテンアメリカ学会大会について

a. 大会運営委員の追加：南山大学の富野幹雄及び松下マルタ両先生の追加委嘱が承認された。

b. 日程及び10周年記念シンポジウムの共催可能性：前回理事会の決定通り大会は91年6月8日（土）及び9日（日）とするが、外国からの招待者に対する予算的措置がつけば、7日（金）に学会と南山大学による国際シンポジウム共催の可能性を検討することが承認された。

c. 名古屋市共催と公開：学会大会は名古屋市との共催（名古屋国際センター使用等）になる予定、そのため総会等を除いて公開とすることが承認された。

d. 外国招待者の検討：オクタビオ・パ

ス、レオポルド・セア、エドマー・バラチャ等の候補者の検討がなされた。

e. 大会報告希望者：次号ニュース・レターに発表希望者（8日および9日の午前予定）を募る囲み記事掲載予定。

2)新入会員の承認

鶴田利恵（名古屋大経済学研究科）、子安昭子（上智大大学院外国語学研究科）の2氏の入会を承認した。

3)退会の承認

細川幸夫氏の退会を承認した。

3. 報告事項

1)10周年記念事業に関し雑誌目録作成のための運営委員会開催（予定）が報告された。

2)国際交流に関しLASAのタスク・フォースと共にシンポジウム開催可能性が検討されている旨報告された（ウイスコンシン大学のスターリング先生が来年2月に再来日される際、具体的に相談・調整する）。

3)「地域研究推進のための国立共同利用機関設立にむけての要望書」（第48回理事会決定）を次号会報に掲載する旨報告された（理事長）。

○地域研究推進のための要望

日本ラテンアメリカ学会は、わが国におけるラテンアメリカ地域研究の発展と充実をめざして、その活動を進めてきた。アメリカのラテンアメリカ学会（LASA）との交流促進をはじめ、内外のラテンアメリカ研究者間の学術交流・協力のネットワークも形成されつつある。

一方、最近の世界諸地域の変動は、海外地域研究の重要性に対する社会的関心を著しく高めており、地域研究推進のための組織整備

が緊急に必要であるとの認識が強まっている。とりわけ、ラテンアメリカ地域研究に関しては、その整備が特に遅れており、今後の一層の研究の発展のために必要な条件が、十分に整備されていないのが実状である。

以上の点に鑑み、今日、ラテンアメリカ地域に関する資料・情報の効率的集積、関係研究者の連絡、共同研究の組織・調整、及び海外の研究機関との交流に役立つようなナショナルセンター設立の必要性がますます痛感されている。

上記のような認識に立って、我々は我が国学術関係の各方面の要路の方々に対し、ラテンアメリカ研究の充実のための施策を含め、地域研究推進を目的とする共同利用機関の設置に向けて、早急に有効適切な措置をとられるよう、ここに強く要望するものである。

1990年12月22日

日本ラテンアメリカ学会理事会

2. 国際セミナー

○日本・中米国際セミナー

狐崎知己（日本・中米セミナー
実行委員会事務局長）

さる9月28日より30日までの3日間、国連大学と青山学院大学を会場に本学会と国連大学ならびに国際文化会館の後援を受けて、日本・中米国際セミナー実行委員会主催の標記セミナーが開催された。これは政府や財界ではなく、幅広い多元的な関心や価値観をもちながらも、お互いの協力と尊敬にもとづく日本と中米の横範的関係の構築を望む市民がイニシアチブをとった点で重要な意義があり、ここにセミナーの性格と討議内容をご報告申し上げる。

1. 開催主旨

現在、中米地域は十年を超える紛争から復興へ向かう重大な転換期にさしかかっており、地域全体の平和と民主化そして発展のために日本政府と市民社会の双方が積極的な役割を果たすことが期待されている。だが、日本では所謂ポスト冷戦時代の国際変動を、一方では北の世界での緊張緩和と協力の進展、他方では南の世界における新たなタイプの紛争の

増加として二分化して捉える傾向が見られ、とりわけ中東や中南米地域に関する報道では南の世界が政治的不安定やテロリズム、貧困、麻薬、環境危機など北を脅かす諸要因を抱えた「悪の周辺部」と見なす新たなイデオロギーにもとづく論調が強まっている。

このような状況をまえに我々に必要なのは、南の人々との直接対話を通じてグローバル変動の影響を南の視点から理解すること、ならびに南の諸地域と国際社会の相互関係を多角的な視点から検討することを通して拡大しつある南北格差を是正し、国際社会における社会正義の実現に向けて日本の政府と市民社会がいかなる役割を果たすべきかを緊急に考察することであろう。グローバル変動と湾岸危機の勃発、FSLNの選挙での敗北等のために中米地域への関心が世界的に低下するなかで、このような認識にたつならば、コンタドーラやエスキプラス・プロセスに代表される域内和平イニシアチブとECAや非同盟諸国、国連等の域外諸国や諸機関の支援を受けて平和的手段による紛争解決に努力する中米地域は、今後、南の諸地域に展開されるであろう紛争の軍事的手段によらぬ解決と持続的平和・発展のための国際協力のありかたを検討していくうえで、一つのモデルともなるべき重要な教訓と経験を国際社会に与えるものである。

2. 性 格

セミナー実行委員会は中南米地域を専門とする研究者どうしの学術交流の枠を超えて「民衆志向の学術会議」という新機軸を打ちだし、国際政治経済やアジア地域の専門家とともに、日本と中米の間の民衆連帯を構築すべく市民社会の幅広いセクターに参加をよびかけた。

この結果、海外からの17名の参加者に関しても中米復興開発国際委員会や国連など国際的舞台で活躍する地域の代表的オピニオン・リーダーに加えて、中米経済統合銀行や中米経済社会開発支援行動委員会（CADES CA）、中米大学審議会（CSUCA）、中米・カリブ地域社会経済研究調整センター（CRIES）など定評ある地域機関の代表、

ニカラグア現政権の代表とサンディニスタ前政権の閣僚らの同時参加など、きわめて多元的な構成が達成された。また、中米側実行委員会がパナマからの参加を重視したことは、最近の中米首脳会談におけるパナマ政府のオブザーバー参加と併せて、今後の地域協力と統合の動向を考えるうえで見逃せぬ点であると言えよう。

同様に、34名からなる日本側実行委員会の構成も本学会員8名の他に、アジア地域や国際政治・経済の専門家、女性問題研究者、中南米やアジアとの連帯活動に従事してきた市民運動家、宗教人（カトリック、プロテス tandemト、仏教）、報道関係者ら日本における中米へのきわめて多様な関心を反映した構成となった。日本側の負担分約550万円のうち7割は企業から寄付を募り、残りは多くの人々の個人寄付によって賄われ、政府関係機関からもロジ面での支援等を受けた。

3. 内容

(1)「国際システムの変動と中米地域」、(2)「中米地域の政治危機と国内アクター：平和と民主主義および発展への役割」、(3)「中米地域の潜在力、発展モデル及び国際社会の役割」、(4)「中米危機とオールタナティブ：国際変動の影響と日本の役割」の4つのセッションで計13名が報告、15名がコメントを行うとともに一般の国際会議では見られぬ率直な質疑応答が展開された。討議の成果は、海外からの参加者全員と日本側実行委員会の有志が参加した「グローバル変動と日本および中米」、「国際協力」、「市民社会の役割」の3部会でまとめられた後、「東京宣言」として記者会見の席上で発表されるとともに、のべ3時間にわたってセミナー参加者の討論会を放映したNHK衛生放送でも報道された。以下に「東京宣言」の要旨と主要な論点を紹介する。

東西緊張緩和にもかかわらず世界の大半の人々が経済・技術進歩の恩恵から排除されており、南北間の矛盾は深刻化している。ポスト冷戦時代の世界システムでは、軍事力に依存した安全保障の終焉と紛争の平和的解決、イデオロギー的同盟関係ではなく、人類共通の利益にもとづく純粋な多国間主義と国連の役割の強化、女性をはじめとする市民の間の国際的連帯と参加が特徴となるべきである。国

際交通路の要所である中米地域は南北アメリカと太平洋と大西洋の経済地理的な懸け橋に、また、日本はグローバルな非軍事化と人類の調和への支援を通して南北の懸け橋になるべく選択肢が提示されている。平和と発展、民主化を希求する中米諸国はエスキプラス宣言とアンティグア宣言において、貧しい人々の生活改善と人権の保障を基盤とする民主化と域内協力の推進を表明したが、その努力は経済的不平等、交易条件の悪化ならびに債務危機の深刻化によって危険にさらされている。日本は中米との様々なレベルでの直接対話を通して、地域の平和と民主化そして統合の達成に向けて莫大な貢献をなしうる。とりわけ、各国への基本的ニーズの供与に加えて、地域の自立と平和ゾーンの確立、債務の教育・環境基金への転換を目的に種々の地域機関への支援を開始すべきである。

セミナーでの討議を通して、地域紛争の解決には域内の和平イニシアチブを国際的に支援することが唯一の解決策であり、エスキプラス合意の達成に向けての中米諸国の努力を日本が積極的に支援するべきであるとのコンセンサスが見られた。しかし、現状認識や具体的な政策に関しては、中米と日本の間、また双方のなかにも次のような相違が存在した。冷戦の終焉は中米にとり米国の軍事的ヘゲモニーの一極化を意味するとともに、内戦と激しい人権弾圧が続くエルサルバドル及びグアテマラの現状が中米全体を再び危機に陥れる危険性が存在するとの悲観的シナリオが示される一方、中米からの参加者は地域全体の非軍事化を進めた平和ゾーンの確立と域内協力の推進、さらに市民社会の圧力による米国の中米政策の変革による復興・発展という侧面を強調して、これまでの中米のイメージを転換させる点に比重を置いていた。また、中米側が莫大な期待を寄せる日本の役割に関しては、アジアへの援助政策や米国に追随した中米政策の分析にもとづく否定的見解が示される一方、平和ゾーンや域内協力など中米側が掲げた展望への国連や地域機関を通した支援の拡充など具体的な日本の貢献策が提示された。

セミナー終了後も10月4日の帰国まで連日、海外からの参加者は政府機関や民間企業、市民団体、宗教団体、研究者との間で活発な討論を繰り広げ、「ニカラグア復興のための

共通のアプローチ」と題してニカラグア政府代表とサンディニスタ前政権閣僚が行ったシンポジウムでは、双方が多大な柔軟性とプラグマティズムをもって協力しあうことが言明された。市民団体との会合には各組織の代表200名以上が列席し、民間企業との会談にも約30社の代表が参加し、幅広いセクターの間で中米とのダイレクトな関係樹立のための土台づくりが、このセミナーをもって着実に開始されたと言えよう。

4. 今後の活動方針

中米からの参加者は帰国後すぐに「東京宣言」の実現を各区政府に働きかけ、平和ゾーン構想に関しては平和大学が中心に研究を進めること、債務の教育基金への転換は中米経済統合銀行が調整役を果たし、経済協力については中米副大統領会談においてC A D E S C Aを事務局に据えて地域レベルでの食糧の自給体制の確立をはじめ多くの試みを開始することが決定されるとともに、日本に対して各テーマに関する共同研究が呼びかけられている。

日本においても市民団体のネットワークが構築され、11月中旬に東京で行われたニカラグア人神父の講演とコンサートには600人が参加したほか、年末から年頭にかけてもエルサルバドルの人権擁護活動家やニカラグア前外相らを招待した会議が企画されるなど連帯活動を活発化させている。セミナー実行委員会も来年夏に中米で開催される第2回セミナーへ向けて準備を開始しており、本学会員の積極的参加を期待している。

○国際シンポジウム「マヤ文明と幻覚剤」

宮西照夫（和歌山大学）

高度に体系化された古代マヤの医学を明らかにするため、現在第一線でマヤ伝統医学を研究する医学学者はもとより細菌学者、生物学者、医療人類学者、そして考古学者を国内外より招き、国際シンポジウム「マヤ文明と幻覚剤」を1990年10月13日より3日間にわたり和歌山大学にて実施した。

13日は、O. フッテラー氏（メキシコ伝統医学アカデミー）による「神の肉のマリア・サビナ」の特別講演があり、続いて第一セッションでは、大井邦明氏（京都外大）による南部マヤ地域の重要性やメソ・アメリカ文

化の特徴は幻覚発動性植物を含む植物利用文化にあるとの指摘に始まり、外科術、整骨術、そして東洋の鍼に似た伝統的治療技術がE. カセレス氏（グアテマラ・CEMAT）により明らかにされた。またJ. ソラレス氏（グアテマラ・サンカルロス大）の象眼細工を施した歯のレントゲン写真及び組織構造学的研究は古代マヤの歯科技術の水準の高さを立証すると同時に、その非実用性が彼等の宗教・宇宙観や政治権力の構造を調べる鍵となるとして参加者の注目を集めた。

14日、第二セッションでは、現在インディヘナ社会でマヤ伝統医学がいかに継承され、如何なる役割を果たしているかがE. ヴィジャトロ氏（グアテマラ・民俗学研究所）により報告され、さらに伝統医学知識を西欧的或いは科学医療体系に統合する方法について、特に第三世界の最大課題の一つである下痢疾患を具体的モデルとし池田光穂氏（日本学術振興会）が検討した。また西沢麦夫氏（徳島文理大）はインドネシアのズクの研究で開発した化学合成手段を用いての、マヤ地域における有毒植物の成分分析の可能性を報告した。

第三セッションでは、G. グスマン氏（メキシコ生態学研究所）が幻覚キノコの儀礼的使用による種類別世界地域分類を、M. トレス氏（グアテマラ・サンカルロス大）が古代マヤ社会で用いられた白睡蓮等、キノコ以外の幻覚発動性植物とその使用方法を、さらに筆者宮西がこれらの幻覚発動性植物の古代マヤの生け贋や自己儀式等の流血儀式への利用やその慢性使用による運命論的思考形成等、古代マヤ人の宗教・精神生活への幻覚剤の関与について報告を行った。

この後討論会に入ったが、会議は国外11名、国内研究者143名の参加を得て活発な議論が展開された。

尚15日は、高野山の宿坊に場所を移し、キノコの石像や宮西が提示したマヤ滅亡論をめぐって激論が招待研究者間で交わされた。

3. 会員活動報告

○第26回 AJELB (ポルトガル・ ブラジル学会) 定期大会報告

三田千代子

第26回ポルトガル・ブラジル学会 (Associação Japonesa de Estudos Luso-Brasi-

leiros-AJELB)* が 10月20日(土)、21日(日)に上智大学で開催され、およそ30名の会員が関西、関東より参加した。大会第1日目には、言語、コミュニケーション論、歴史学など様々な視点から研究分野に関する報告があった。また、同日学会創設25年を記念して AJELB 創設25周年記念史が刊行され、引き続き記念パーティーが ブラジル大使とポルトガル大使代理を招いて開催された。2日目には総会が開催され、25年目の節目を迎え、今後の学会の活動について討論が行われた。昨年検討された研究誌 A N A I Sへの投稿言語はポルトガル語又は日本語のいずれかとすることが再確認され、国内会員の積極的参加を図ることが確認された。日本におけるポルトガル語研究者のさらなる育成のために、本学会の役割は今後ますます充実したものになることが期待される。次期大会は 1991年10月19日、20日に東京外国语大学で開催される予定である。

本年度大会の研究報告及び報告者は以下の通りである。

1. "O Cérebro e a Aprendizagem de Línguas Estrangeiras", por Sra. Megumi Yagyu.
2. "Existe a Voz Reflexa?", por Prof. Mineo Ikegami (Univ. de Línguas Estrangeiras de Tokyo).
3. "Comunicação Não-Verbal: Um Estudo Comparativo Brasil-Japão (III)", por Profa. Noêmia Hinata (Univ. Sofia).
4. "O Porto, Origem de Portugal e do Vinho do Porto", por Prof. Masayasu Abe (Univ. Kokushikan).
5. "A AJELB e o Mundo Afro-Luso-Brasileiro", por Prof. José Álvares (Univ. de Línguas Estrangeiras de Tokyo).

○第27回ラテン・アメリカ政経学会全国大会 小坂允雄

大会は、11月17～18日、産能大学で開催され、多くの質疑応答と活発な討議が行われた。当日のプログラムとその内容は大略以下の通りである。

(1) 共同討議「ラテンアメリカの日系企業

の現状と問題」基調講演 福島 穆 (日本電気株式会社中南米事業部長)

司会 山田典秋 (三菱信託銀行)

パネリスト

柿沼宏之 (バンコメル)

内多 允 (世界経済情報サービス)

黒崎利夫 (日本貿易振興会)

福島は、ラテンアメリカにおける電気通信事業の発展を踏まえながら、メキシコ、ブラジル、アルゼンチンにおける NEC 現地企業の設立経緯と経営上の諸問題について詳細な説明を行なった。これに基づき、パネリスト、大会参加者をまじえ、当該国政府の政策、出資比率、パートナー、グローバリゼーション等の問題、さらには、電気通信事業の情報産業としての性格、そのための技術開発、海外投資の理念等広汎な問題について興味ある議論がかわされた。

(2) 大会報告

1. 「メキシコにおける人口過程の分析－主に社会経済指標との関連から－」西岡八郎 (厚生省人口問題研究所) 多産多死から多産少死、ついで少産少死へ移る人口過程を、メキシコの各州別に、人口指標と社会経済指標との関連から分析した。

2. 「メキシコの経済安定化政策」石黒馨 (阪南大学) 安定化政策では、メキシコの場合、財政赤字よりも、為替調整や賃金調整、インフレ期待の要因が重要であることを実証的に分析した。

3. 「La Cumbre－中米和平サミットの政治力学－」竹村 阜 (早稲田大学大学院)

8回にわたる中米首脳会議を中心に、域内外の関係変化をクロノロジカルに分析した。

4. 「ニカラグアにおける〔社会主義〕革命の成立、発展と挫折について」後藤政子 (東京外国语大学) 革命政権下の政治変動の過程を分析し、あらためて、ニカラグア革命の性格を考察した。

5. 「歴的背景からみた現在のラテン・アメリカ累積債務問題の考察」前田正裕 (ラテン・アメリカ協会) ラ米債務史を振り返り、その経験を生かしながら、長期的な解決を図ることの重要性を主張した。

4. 書評 野谷文昭『越境するラテンアメリカ』PARCO

出版、1989年、270ページ。

評者：木村 榮一（神戸市外国語大学）

実作の翻訳に比べて、批評、評論の面で立ち後方が見られるラテンアメリカ文学において、今回ようやくまとまった形で評論集が出版された。野谷氏の『越境するラテンアメリカ』がそれだが、まことに喜ばしいことである。後書きにもあるように、この作品は著者がこれまで雑誌、新聞等に発表した論文、評論、エッセイ、書評を集めたものなので、当然のことながら新大陸の現代文学の全体像を取り上げたものになってはいない。しかし、長年ラテンアメリカ文学の翻訳紹介に携わってきた著者の手になるものだけに、随所に興味深い記述が見られる。

ペルーの政治活動家アヤニデニラニトーレを中心になどに当時の政治状況を論じた「一九二〇年代ラテンアメリカの統合と分裂」や中上健次、村上春樹を取り上げた論文、エッセイも刺激的で面白いが、中心になるのはやはりラテンアメリカの現代文学を論じた評論だろう。「ニュー・ジャーナリズムとガルシア＝マルケス」では、ガルシア＝マルケスが若い頃ジャーナリストとして活躍していたことに目をむけ、その体験が彼の文体や作品のうえに色濃く影を落としていると述べている。従来、ともすれば軽視されがちだったガルシア＝マルケスのジャーナリストとしての体験と、彼がそこから編み出した独自のスタイルが、トゥルーマン・カポーティ、あるいはニュー・ジャーナリズムの論客として知られるトム・ウルフの述べている理論や考え方、スタイルを先取りしたものであるという指摘は斬新で、説得力がある。

そのほか、ヨーロッパでとりわけ高い評価を受けているボルヘスの作品を取り上げつつ彼のナショナリズムに対する考えについて言及し、ボルヘスをはじめラテンアメリカの現代作家がいすれもヨーロッパの辺境（ボスは、ラテンアメリカの現代文学をヨーロッパ文学という大木の枝が新大陸に移植され、それが大きく育って花開いたと形容している）に身を置いているがゆえに、かえってヨーロッパを全体としてとらえる視点を持つことができるのだと述べた「ボルヘス 驚嘆するヨーロ

ッパ」、ボスとアンドレ・ブルトン、シュールレアリズムとの関わりに触れつつ、ボスの詩に見られる健康なエロティシズムを論じた「ボスのエロティシズム」、『百年の孤独』、『族長の秋』、『予告された殺人の記録』などに登場する女性に焦点を当て、ノイマン、ユンクなどの説を引きつつその女性たちが多分に大母＝聖なる娼婦としての性格を備えていることを明らかにした「ガルシア＝マルケス、大いなる母の世界」、ボルヘス、ネルーダ、ボスといったわが国でもよく知られている詩人をはじめ、キューバのホセ・レサマ＝リマ、チリのエンリケ・リン、ニカラグアのエルネスト・カルデナルといったラテンアメリカの現代詩を代表する詩人たちを紹介した「ラテンアメリカの現代詩」といった論文、評論がここに収められている。

新大陸の現代文学に関する該博な知識と文学的感受性の鋭さをうかがわせる文章が随所にちりばめられているこれらの論文、評論、エッセイはそれぞれに読み応えがあり、読者を刺激する。しかし、難点がないわけではない。例えは、引用の過多がそれである。僕自身も引用が好きでよく使わせてもらうので口幅ったいことは言えないのだが、自戒をこめて言わせてもらえば、引用が多すぎるためにひどく読みにくいうえに、時に論旨がぼやけことがある。また、あることを説明、証明するために引用するのはいいのだが、その引用が逆に肝心の論旨をあらぬ方向に引き摺ってゆくきらいがあり、全体を読み終えたときに、著者が何を言わんとしていたのか判然としないことがある。また、本来ならきちんと説明なり証明なりした上で出すべき結論が、時々何の前置きもなくぽんと投げ出されていることがあり、しばしば読者を戸惑わせる。こうした欠点はあるものの、著者は文学に関する該博な知識と鋭い感受性に恵まれており、それがこの作品を背後から支えている。その意味でも、豊かな才能に恵まれた著者の今後の活動に大きな期待が寄せられる。

書評 中牧弘允『日本宗教と日系宗教の研究－日本・
アメリカ・ブラジル』刀水書房、1989年、
526ページ。

評者：松岡 秀明（東京大学大学院）

本書の著者中牧弘允氏は、国立民族学博物館助教授をつとめる気鋭の宗教学者であり、学生時代から一貫して現代の宗教を研究してきている。本書は氏が1986年に東京大学に提出した博士論文に補足を加え発展させたものであり、およそ15年の長きにわたるフィールドワークにもとづいた諸論考の集大成というべき性格を持つ500頁を越える大著である。

本書を貫くテーマは日本宗教の変容である。氏の問題関心を「序論」にみていこう。中牧氏は「宗教思想の三類型」として、「土着主義的宗教」、「土着的宗教」、「普遍主義的宗教」を提示している。そして、この三極間の変動を、土着主義化、土着化、普遍主義化という概念で把握しているが、理念型間の変動を充分に考慮することで、よりダイナミックな宗教の理解が可能となると思われる。また、中牧氏は「比較文明論的視点」(p. 5)から、正統性をメルクマールにして、文明の三類型を示している。正統性の主張に固執するアメリカ文明、逆に渋泊なブラジル文明、正統性の主張を認めながらも共存する日本文明という三つの文明のタイプである。この序論は非常に明快であり、示唆に富んでいる。そして、本論ではこのような問題関心にもとづいて日本、アメリカ、ブラジルの具体的な事例が分析されていく。以下、ブラジルについての論考に絞って論の展開を追っていくことにしたい。

第3部の「ブラジルの日系宗教」では、「序章」に続いて「日系人と日系宗教」、「非日系人と日系宗教」がそれぞれ分析されている。ブラジルにおける日系宗教の展開で特徴的なことは、日系人以外にも浸透していることである。生長の家、PL教団、日蓮正宗、世界救世教といった教団では、信者のうちで非日系人が占める割合が80%を越えており、文化変容を考える場合にたいへん興味深い現象といえるだろう。

「非日系人と日系宗教－仏教とパーソナル・リバティー教団の事例」では、PL教団を対象とした分析が行なわれている。PL教

団は日本で都市型宗教として発展したが、ブラジルでもその性格は基本的には不变であるとして、教団の示す家庭倫理、職業倫理、市民倫理を信者がどのように受け入れているかを信者の体験談を資料として分析し、「奇跡信仰から生活倫理へ」(p. 434)重点の移行という変容を描き出している。この論考にもとづいて、中牧氏は、ブラジルで非日系人に受容された教団の特徴を、奇跡や現世利益に裏打ちされた生活倫理の実践を強調しながら、急速な工業化にともなう社会変化に対応した宗教的救済を信者に提供している点にあるとする。ブラジルの急速な工業化・都市化が、日系の「都市型倫理宗教」が受け入れられる素地をつくっていたという指摘は興味深い。近代化、工業化と倫理宗教の発展との関係は日本の新宗教を理解する際に重要なポイントであると思われる。

しかしながら、本書全体の「結論」における「日本の近代化でさまざまな苦惱の解決にあたってきた新宗教がやや遅れて近代化をはかる“中進国”的ブラジルで似たようなニーズにきめ細かく答えているからにはかならない」(p. 457)という氏の主張にはいささか戸惑いを感じ得ない。この論法は、地域性を捨象した単線的進化論ではあるまいか。「序論」で提唱された比較文明論の視点とは相違があると云えるだろう。

本書を通読して気になったのは、「序論」で示された論理が必ずしも本書全体を統べていない点である。そうした例をいまひとつあげてみよう。中牧氏はPL教団のブラジルへの定着の過程を「現地化」という概念で捉えようとしているが、この「現地化」が「土着化」とどこが重なり、どこがどうズレているのかが不明瞭で読者の混乱を招く恐れがある。集大成的な著作ゆえの限界といってしまえばそれまでだが、残念に思われる。

とはいっても、本書はアメリカ、ブラジルをも射程に入れて日本宗教を俯瞰するというきわめて今日的でスケールの大きな学問的貢献をしており、日本宗教研究にとって大きな貢献であることは疑うべくもない。

書評 加茂雄三・細野昭雄・原田金一郎編著『転換期
の中米地域』大村書店、1990年、354ペー
ジ。

評者：田中 高（四日市大学）

周知のように、1987年8月の中米和平協定（エスキープラスⅡ）の成立以後、中米情勢は本書のタイトルどおり大きく「転換」してきた。最も重要な「転換」は、何といってもニカラグアにおける革命政権の選挙による敗退と、話し合いによる内戦の終結であった。域内にはエルサルバドル、グアテマラ内戦が残されており、予断は許されない。しかし、武装闘争による「民族解放運動」は、各国内の民衆レベルでも国際的にも、もはやそのモメンタムを失っている。80年代のような戦闘状態が近い将来再現する可能性は、少ないであろう。本書でも強調されているように、中米のこれからに課題は、経済復興と確固とした民主体制の構築、ということになろう。

本書には5人の日本人による論文と、補章として3人の外国人（パナマ、スペイン、米国）の報告書が掲載されている。また資料として2つの文書が紹介されている。通読して先ず気づくことは、著者たちがいずれも一致して、いわゆる中米紛争の根本要因を、「東西対立」ではなく、「南北問題」によるものと見ていることである。特にこの点については、加茂論文「中米史の現段階」のなかで、手際よくまとめられており、問題の焦点を整理する際の、強力な助けとなる。経済復興の政策的なアプローチとしては、斯界の第一人者細野昭雄氏による「転換期の国際関係と中米地域」が光彩を放っている。

細野氏は、構造調整の重要性について繰り返し指摘している。これには、産業調整や経済規制の緩和などが含まれている。ここで留意しなければならない点は、氏自身が「構造調整の進め方によっては、強力な大企業を中心とした寡占体制が強化される恐れもないとはいえない」（36頁）と危惧していることである。中米各国の抱えている問題は、その国内市場が狭いがゆえに、自由競争市場が成り立ちにくいくことである。構造調整の必要性については、あらためて指摘するまでもないのだが、それと経済の民主化（公平）をいかにして両立させるか。細野論文はこの問題に正面から取り組んでいる。紙幅のうえからこ

れ以上紹介できないのは残念である。要するにこの論文は、緊急に処方箋を必要とする重病患者に、順序立てて治療法を説明したものと理解すれば良い。行間には、細野氏のエコノミストとしての使命感がにじみ出ている。

原田論文「中米共同市場の理念と現実」は、中米における経済統合の必要性を、「集団的自力依存」という視点から論じている。経済統合の重要性については、筆者も原田氏と全く同意である。但し「このような低開発構造の打破、すなわちニカラグアでみられるような根底的な農地改革という前提条件なしには、経済統合がその本来の目的を達成することはありえない」（70頁）という意見には賛成しかねる。筆者はまず、ニカラグアの農地改革を試行錯誤の連続と理解しているし（この点については拙著「ニカラグアの農地改革」『アジア経済』1987年8月号）、現在サンディニスタ党内では真摯な反省が行なわれている。また農地改革を経済統合目的達成の前提条件にしてしまうと、10年河清をまっても統合は進まないだろう。中米の現状は緊急を要している。

狐崎論文「対中米援助の国際比較試論」はEC、米国、日本の過去の経済援助を比較している。おそらくこの分野ではこれまでになかった業績であり、貴重である。特にレーガン政権時代のニカラグア孤立政策が厳しく批判され、それとの比較でEC援助の有効性が指摘されている。「眞の人道援助とは、日米関係などの政治的考慮とは別の基準をもって、もっとも援助を必要としている人々にたいして優先的に資源を配分していくことであろう」（120頁）といった、援助哲学も披露されている。望蜀の難を恐れずに贅言すれば、援助される側の問題点も指摘してほしかった。4年間の筆者自身の中米での経済協力の体験では、受け入れ国側の問題点も大きいと思う。

松下論文「ニカラグアにおける革命と女性」も、これまで殆ど日本で紹介されることのなかった、革命と女性解放運動を扱っていて、ユニークである。この種のテーマはとかく時事的になりがちであるが、法制面での変化に

についての記述もあり、資料的な価値がある。制度面の研究は、日本国内にいてもかなりの水準のものが期待できる、という例証になっている。

最後に、困難な出版情勢の下で本書を刊行された書店の労を多としたい。

3. 会員活動報告（つづき）

○第36回日本イスパニア学会大会

国本伊代

12月1日（土）と2日（日）の両日、東京都品川区の清泉女子大学において第36回の年次大会が開催された。発表された研究報告は以下の通りである。

- Amat, Edelmiria. "Catalán y valenciano : una aproximación lingüística."
- 福井千春「『わがシッドの歌』の製作年代について」
- 稲本健二「換骨奪胎の詩学あるいはドン・ファン試論」
- 石崎優子 "Transitividad"
- 川上茂信「音節構造とアクセント」
- 小池和良「熟語動詞の統語構造」
- 熊谷明子「メキシコ新生にみるマリンチェの重要性」
- 三木一郎「連語の等位接続における語句の省略について」
- 三好準之助「lo + 比較語」
- 酒井優子「スペイン語の性決定について」
- 杉浦 勉「カルメン・マルティン・ガイテと小説の<戦後>」
- 立林良一「バルガス・リョサ『マイタの物語』におけるメタフィクション性」
- 上野勝広「現代スペイン語の形態論的『逸脱』に関する若干の考察」

5. 学術・文化情報

平成2年度文部省科学研究費補助金を受けたラテンアメリカ地域関係課題一覧

[一般研究 C]

- 「白系南米人と日本人の体温調節反応の比較」 勝浦哲夫（千葉大）
- 「南米ペルー原住民（プレインカ時代）人骨の人類学的研究」 加藤克知（長崎大）
- [奨励研究 A]
 - 「ペルーと南米諸国の軍部の政治思想の比較研究（1880-1970年）」大串和雄（山形大）
 - 「米国領ペルト・リコ及び仏領アンティル諸島に於ける「反独立」運動の研究」 志柿光浩（長崎大）

[奨励研究 (特)]

- 「中南米・カリブにおける重層的統合機構

の研究」 松本八重子（東大）
○「ラテンアメリカ地域を対象とする医療人類学の基礎的研究」

池田光穂（国立民族博物館）

[国際学術研究]

- 「アンデス南部・パタゴニア地域における近年の氷河変動の特性」（チリ、アルゼンチン） 成瀬廉二（北大）
- 「中部アンデス地域の古生代後期古生物群集の解明」（ボリビア、ペルー、カナダ） 坂上澄夫（千葉大）
- 「中南米におけるリーシュマニア症とその伝播に関する研究」（エクアドル、パラグアイ） 橋口義久（高知医科大）
- 「高地アンデス都市の民族学的研究」（ペルー） 友枝啓泰（国立民族博物館）
- 「ブラジルのアルカリ複合岩体に見られる希上類鉱物、放射性鉱物の調査研究」（ブラジル） 床次正安（東大）
- 「ブラジルの民衆文化に関する研究－宗教を中心に－」（ブラジル、米国） 中牧弘允（国立民族博物館）
- 「ブラジル北東部における土地利用・水利の変遷と生態系の地域的变化」（ブラジル） 西沢利栄（筑波大）

[共同研究]

- 「日本と南米太平洋側の新第三紀イベント：その年代と性格」（相手チリ、ペルー） 土 隆一（静岡大）
- 「チャカルタヤ山におけるエマルジョン・チェンバー共同実験」（相手ブラジル、ソ連、ボリビア） 藤本陽一（早稲田大）
- 「イベリア系文化圏」における農村共同体の再編と都市の変容」（相手メキシコ、スペイン、ブラジル） 清水透（東京外語大）
- 「赤道ULFならびにエレクトロジェットの研究」（相手ブラジル、オーストラリア、ペルー） 北村泰一（九州大）

トヨタ財団 1990年度研究助成 助成対象一覧（ラテンアメリカ関係）

[個人奨励研究]

- 「ラテン・アメリカにおける文化遺産と歴史観の様態と変容に関する研究」 関 雄二（東大）
- 「ブラジルにおける日本宗教に関する研究－アイデンティティと社会・文化的変化を巡って－」 ホアン・アルベス・ペレイラ（東大）
- 「サンパウロのファベーラ〔貧民街〕におけるエイズ意識・行動・知識調査」 小貫大輔（東大）

〔試行・準備研究〕

- 「ブラジルからの日系出稼ぎ労働者の実態と日本社会の対応－送出国ブラジルと受入国日本での共同研究をとおして－」

渡辺雅子（明治学院大）

6. 近着会員業績

〔抜〕角川雅樹「スペイン語精神医学用語集」『東海大学保健管理センター年報』第20号（1990年8月）。

〔抜〕青木芳夫「ラテンアメリカ人口史－征服期－」『資料ラテンアメリカ』第14号（ラテンアメリカ資料センター、1990年8月）。

〔籍〕水野一編『日本とラテンアメリカの関係－日本の国際化におけるラテンアメリカー』（ラテンアメリカ・モノグラフ・シリーズ、No.6）上智大学イペロアメリカ研究所、1990年10月。

〔抜〕今井圭子「アルゼンチンへの日本移民史－農牧業経営の先駆者たち－」（同上）

〔抜〕三田千代子「「国民国家」から「多人種民族国家」へ－ブラジル日系人の辿った道－」（同上）

〔抜〕今井圭子「アルゼンチンへの日本移民史－日系現地企業の創業者たち－」（上智大学外国語学部紀要、第24号）。

〔抜〕片倉充造「グレゴリオ・ロペス・イ・フェンテスの石油小説『ウアステカ』再考」『天理大学学報』第163輯（平成2年2月）。

〔抜〕片倉充造「『メキシコ田舎寓話集』と農村学校教育」『外国語教育－理論と実践－』第16号（天理大学外国語教育センター、平成2年2月）。

〔籍〕中島隆三『日常スペイン語手紙の書き方』たまいらぼ社、1990年。

〔抜〕角川雅樹「セント・ビンセント・グレナディーン諸島」『人間の場から』第21号、（東海大学留学センター、1990年11月）。

〔抜〕初谷譲次「キンタナ・ロー州マヤ系インディオの民族史的考察」『天理大学学報』第165輯（平成2年10月）。

7. 事務局から

i) 会員住所の変更

1991年第12回定期大会のお知らせ

- 期日：1991年6月8日（土）、9日（日）
 - 会場：南山大学
名古屋国際センター
- 6月7日（金）に外国人研究者を招いて、
10周年記念シンポジウム開催予定
(ラテンアメリカ学会と南山大学ラ
テンアメリカ研究センター共催)
- 研究発表報告者募集中

大会準備委員会

南山大学外国語学部松下洋研究室
〒464 名古屋市昭和区山里町18
☎ 052-832-3111-535

年報の原稿募集

1992年6月発行予定の『ラテンアメリカ研究年報』（第12号）はアメリカ大陸500年に関連した特集を組む予定です。原稿の締め切りは1991年12月末日ですが、応募規定の詳細については会報を通して改めて御連絡いたします。

年報編集委員会

編集後記

湾岸危機は切迫の度を加えている。地域紛争の平和的解決については中米和平交渉が有効なモデルになるであろうが、それにしてもグレナダやパナマを軍事侵攻した米国が、イラクのクエート侵略を非難して国際警察軍の役割を果たす権利があるのだろうか。（乗）

No.36

1991年1月20日発行

〒305 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学社会工学系細野昭雄研究室内

日本ラテンアメリカ学会事務局

☎ 0298-53-5067